

『これ、どうする？』（使徒の働き 6章 1-7節）2023.8.20.

<はじめに> 教会には問題がない、あつてはならないでしょうか？ 教会も人の集まりですから、様々な問題が起こり得ます。苦情を聞かされ、問題を指摘されるのは、誰でも嫌で避けたいでしょうが、宝の山ととらえる人もいます。これらにどう向き合い、対処するかを学ぶチャンスにもなります。

I 苦情の実像(1-2)

① 寄せられた苦情(1-2)

教会内のやもめへの毎日の配給で不公平が生じている、という声が、12使徒たちの耳に届きます(1)。配給は使徒たちが担っていたようです。そこに彼らが抱えていたもう一つの悩みがありました。それは何ですか。使徒たちはそれをどこに持って行ったでしょう(2)。

② 原因はどこに(1-2)

言葉の違いから来るコミュニケーション不足が考えられます。また、弟子の数が増えたことも大きな要因です。初発の時にはうまく回っていても、働きが拡大すると同じようには進みません。働き手の容量を超えて、不本意ながら全体に手が届かなくなったのでしょう。

③ 問題の背景

教会内での献金と配給は、イエスを信じた人たちが心と意思を一つにした表れとしての自発的な愛のわざです(4:32-35)。アナニアとサツピラの一件(5:1-11)で、人々は献げる心を探られ、より注意深く取り組んだでしょう。それでも苦情が出る事態になったのです。

II 解決に向けて(2-6)

① いろいろな対処の中から(2-3)

不平等だから、担当者が足りないから、もう配給は止めよう、とすることもできます。むしろ責任者を立て、人を増やし、通訳も入れ、漏れのないようにチケット制にするなど・・・しかし、使徒たちは御霊と知恵に満ちた評判の良い人たちを選任することを提案しました。

② 選考基準(3)

この提案を教会全体に呼び掛ける前に、使徒たちは対処を話し合ったはずですが、そこで、実務経験からどんな人に任せれば良いか、祈りつつ選考基準を吟味したことでしょう。この基準から、使徒たちが配給の働きをどうとらえて、何を大切にしていたとわかりますか。

③ 承認と選任(5-6)

この提案を教会全体が喜んで受け入れ、提案に沿う7人を選出します。名前からギリシア系のユダヤ人と見られます。使徒たちは彼らに按手し、神の祝福と権限委譲を祈ります。私たちは神と教会の働きのために、どういうやり方で、どういう人を選んでいるのでしょうか。

III 本質を大切に

① 最優先すべきこと(2, 4)

食事をともにし、貧しい人を助けることは大切ですが、それ以上に大切なことがあります。使徒たちは、神のことばが後回しにしている現状こそ問題の根本だと気づきます。優先順位が狂って来ると、各所から異音・違和感が生じるのは、教会も人の世も同じです。

② 神に聞き、神と語らう(5-6)

みことばを通して神から語り掛けを聞くこと、祈りによって神と語り、自分の心中にあることを神に知っていただき、神の教導と助けを仰ぐことは、イエスを信じる者にとって生命線です。イエスとつながる人のうちに、信仰と忍耐、愛とあわれみが豊かに湧き出て来ます。

③ 神と人をつなぐ(7)

神と自分をつなげる幸い・素晴らしさを味わっている人は、周囲にもそれを分ち流すことが自然とできてきます。この一件を越えて、神のことばが広まり、神と人を仲介する祭司たちが続々と信仰に入ったのは、自分たちの職責の具現を見抜いたからでしょう。

<おわりに> 問題の如何に拘わらず、その中で神と私たちの関係を探り整えようと、聖霊は教会と信仰者に今も働き、ささやき、行くべき道を照らし、その道へと私たちを導かれます。人の世も教会も問題に悩まされますが、それをういて練り聖め、整えられて行きます。(H.M.)